

# 中世マルセイユの海上保険契約(再考)

大谷 孝一

## 目次

1. はじめに
2. 1328年11月12日の用船契約書
3. 1379年2月15日の仮装売買契約書
4. 無利息消費貸借の様式
5. ジェノヴァの影響
6. 1427年2月17日の保険契約書
7. 1427年11月26日の保険証券
8. 1438年3月29日の保険契約書および1438年12月18日の記録
9. 1434年7月28日の保険契約に関する記録
10. 1584年10月15日の St. Ilary 号積み貨物の保険証券
11. 1400年代の船舶保険契約
12. 1471年5月21日の船舶保険契約に関する記録
13. 1496年の Sainte-Marie 号保険契約
14. 1497年4月27日の保険証券
15. おわりに

## 1. はじめに

(1) これまでに公にしたフランス海上保険契約の生成史に関するいくつかの論文<sup>1)</sup>の中で、筆者は何度か南仏マルセイユにおける初期の海上保険契約の状況について触れてきたが、このフランスにおける海上保険契約の生成の歴史を

探る上で、マルセイユの占める地位がいかに重要であるかについては、ここで改めて述べるまでもない。すなわち、この地マルセイユは、必ずしもイタリアから海上保険が導入されたフランス最初の都市ではないけれども、海上保険がイタリアで生まれてからそれほど時を経ることなく、この地に伝えられたであろうという、時の古さや地の利ばかりではなく、現在まで知られている史料の豊富さや保存状況の良さ、さらには、これまでに内外の学者によって公刊されてきた海上保険契約生成史研究の内容を覆すその史料の重要性に至るまで、中世マルセイユを除いてフランスにおける海上保険契約の歴史は語れない。

そこで、これまでに筆者が公にしたマルセイユにおける海上保険の生成に関する研究を、その後の研究をもって補いながら再考してみたいと思う。

(2) フランスでは、メロヴィング王朝 (Mérovingiens, 486～751年) の初期には既に商業はかなりの隆盛を誇っていたのであるが、この隆盛はフランク王国の全盛を導いたカール大帝 (Charlemagne, 在位768～814年) の輝かしい治世下まで続いた。

このカール大帝の死後、フランク王国は長子ロタール1世のフランク王国 (ロタール王国, 伊), 次子ルードヴィヒの東フランク王国 (独), カール禿頭王の西フランク王国 (仏) に三分割され、今日のイタリア, ドイツ, フランスの起源ができ上がるのであるが、この頃から兆候を示し始めた幾多の災厄によって、これら初期の繁栄は消滅することになる。この災厄を招来した主因は剽悍極まるノルマン人の侵入であったが、パリ伯ユーグ・カペー (Hughes

---

1 「フランスにおける初期の海上保険契約について」『保険学雑誌』第479号 (昭和52年12月, 日本保険学会) ; 「フランス海上保険史研究——14世紀から18世紀末まで」『早稲田商学』第269・270号 (昭和53年3月, 早稲田商学同攻会) ; 「中世フランスの海上保険(1)」『早稲田商学』第283号 (昭和53年7月, 早稲田商学同攻会) ; 「フランス海上保険証券の系譜を探る」『損害保険事業研究所創立45周年記念・損害保険論集』(昭和54年3月, 損害保険事業研究所) ; 「フランスにおける海上保険の生成」『国際商務論の諸問題——その理論と取引慣行』(平成10年3月, 同文館)。

Capet) がノルマン人を撃退した頃 (885年) から (カペー王朝——987～1328年), 封建制度が勃興し, 商工業の発展の抑圧に拍車をかけることになった。

しかし, 封建制度が定着し, 社会が安定するにつれて, 手工業や商業が成長し, これらの中心地に都市が発達した。更に, 前後7回にわたって行なわれた十字軍の遠征は, 封建諸侯の権力を減退させ, 封建制度そのものを衰退させた。と同時に, 東方との接触によって, 商業は一層の発展を見た。自由都市 (communes) の解放が一層容易になり, 国王の掌中に権力を集中することによって, 秩序が回復された。

10世紀末から続いたカペー王朝が断絶し (1328年), ヴァロア王朝のフィリップ6世 (Philippe VI) が即位したことに対して, 王位継承権を主張するイギリスが開戦し, 1339年から1453年まで英仏間で戦わされた激しい百年戦争 (la Guerre de Cent Ans) によって, フランスの封建貴族は大打撃を被り, 国王による中央集権化が一層進んだが, この間も商工業は順調な発展を遂げた。

この間, マルセイユ (Marseille) は常に成功裡に海上商業に従事していた。マルセイユの商人の獲得した富は, 彼らをしてマルセイユ地方の諸貴族の封建的権力支配および Saint-Victor 教会の宗教的権力支配に対抗させるのに十分であった。

フランスで, 東方諸国との遠隔地商業を行なった最初の都市はこのマルセイユである。地中海東部沿岸地方にフランス領事館を設立できたのも, このマルセイユ商人のお陰だと言われている。イタリアのジェノヴァ (Gênes) やヴェネツィア (Venise) は, その諸種の特権・独占権を維持するために, しばしばマルセイユに対して武力を行使し, 執拗に諸要求を突き付けてきたが, マルセイユはその商業を東方諸国との間に維持することができた。1136年および1152年のイエルサレム王フック3世 (Fouque III) の特許状およびボードワン (Baudoin) の営業免許状によって, マルセイユ人は非常に広範な特権を与えられている。

このマルセイユは、13世紀に入って独立の共和国となった。さらに遅れて、シャルル・ダンジュ (Chalres d'Anjou) に従ってその冒険的遠征に身を任せ、それによって商業上の繁栄を得たモンペリエ (Montpellier) は、マルセイユにとって強力な競争相手となった。この都市は、フランス商業の誉れジャック・クール (Jacques Coeur) を世に出した。

マルセイユ、モンペリエに続いて、ナルボンヌ (Narbonne)、さらに大西洋側ではラ・ロシェル (La Rochelle) およびルアン (Rouen) が商業都市の仲間に加わった。これらの港は既に15世紀には隆盛を極めていた。

しかしながら、外国貿易は長い間外国人、とりわけイタリア人の掌中に止まり、外国貿易が彼らの手から開放されたのは、ルイ11世 (Louis XI) の治世下においてである。

## 2. 1328年11月12日の用船契約書

しかし、既に14世紀の前半に海上保険が知られていたイタリア諸都市、あるいは少なくとも15世紀の初頭までには海上保険が移入されていたヴァレンシア (Valence) やバルセロナ (Barcelone) などのスペイン諸都市と絶えず関係を有していたフランスの地中海沿岸都市が、海上保険の導入について15世紀の中葉または末葉まで待っていたということは考えられない。当然、15世紀の初頭まで絶えず成功裡に海上商業に従事していた上記の諸都市では、スペイン諸都市と同じ頃に、あるいは既にそれ以前に海上保険は行われていたのではないかと。あるいはそこで行われていた冒険貸借 (prêt à la grosse もしくは prêt à la grosse aventure) または海上貸借 (Seedarlehen) から、仮装無利息消費貸借や仮装売買 (vente fictive) という形態を経て、原始的な形態であるとしても、今日見られるような、危険負担を唯一の目的とし、前もって保険料が支払われる真正海上保険契約は生まれたのではないかと。

事実、既に13世紀から、マルセイユにおいて冒険貸借が行われていたことは、

同市の公証人の記録からも明らかであるが<sup>2</sup>、その中でも特に、マルセイユのブーシュ・デュ・ローヌ県立古文書館 (Archives Départementales des Bouches-du-Rhône) 所蔵の1328年11月12日の公正証書は、中世ラテン語で羊皮紙に認められた保険契約に非常に類似した証書であって、以下の原文および拙訳<sup>3</sup>から明らかなおと、ニース (Nice) の市民である Jacomini Marquesani が用船した、マルセイユ在住の官吏 Jean Atous (Jean Atulphi) が所有するガリー船 *la Sainte Aventure* 号について、同年の11月12日から6月24日までの期間につき、サヴォーナ (Savone) およびジェノヴァのギベリーノ派の者たちまたは “pelatis”<sup>4</sup>と言われるモナコ人によって捕獲・拿捕、占有奪取、または破壊されることによって生じる損害について、Hyères 市のユダヤ人 Astruc (Astrug) に、200金フロリンの金額まで負担させている冒険貸借証書であるが<sup>5</sup>、特定の期間、特定の危険について、契約外の第三者に負担させているという点

2 Baratier et Reynaud, *Histoire du Commerce de Marseille*, T II, Paris, 1951, p. 885; Sayous A.-E., *Les Transferts de Risques—Les Associations Commerciales et la Lettre de Change à Marseille pendant le XIV<sup>e</sup> Siècle* (Revue Historique de Droit Français et Etranger, 1935), p. 470; Valéry, J., *Contrats d'Assurance Maritime du XIII<sup>e</sup> Siècle* (Revue Générale du Droit, de la Législation et de la Jurisprudence, 1915 et 1916), Blancard, L., *Documents Inédits sur le Commerce de Marseille*, Marseille, 1884; Boiteux L.-A., *La Fortune de Mer—le Besoin de Sécurité et les Débuts de l'Assurance Maritime*, Paris, 1968, pp 60~61; Gallix, L., *Il était une fois...L'Assurance*, Paris, 1985, p. 99 et suiv

3 この公正証書については、Baratier et Reynaud, *op. cit.*, T.II, p. 885 に仏訳が付されているので、拙訳はそれに拠った。ただし、原文の意味が不明のためか、原文の *exceptioni doli* から *etiam in oliquo revocare* までの部分は仏訳されていない。

4 “pelatis” については、意味不明である。

5 Boiteux, *op. cit.*, pp 186~187. 更に、同じくマルセイユの県立古文書館に保存されている1333年9月18日および同年10月20日付けの二通の冒険貸借証書については、Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p 885, Boiteux, *op. cit.*, p. 190, 木村栄一【ロイズ保険証券生成史】(昭和54年, 海文堂) pp. 160~161 参照。また、1333年4月8日付けの用船契約書が同古文書館に保存されている。これによれば、マルセイユの二人の船主(同時に船乗りでもある)が、二梱包の羊毛をジェノヴァに運送するために自分たちの船を用船に出した。この用船契約の条件は、ジェノヴァの商人 Valentin de Carrega が100金フロリンを貸借金額として受取り、ジェノヴァに到達後3日以内に、24金フロリンの用船料を添えてジェノヴァで返済するが、ジェノヴァに到達しなければ返済を要しないというものであった。——*Cf.* Baratier Reynaud, *op. cit.*, p. 885, n. 1.

で、非常に保険契約に近い。同証書では、無利息消費貸借 (prêt gratuit—de mutuum gratis et amore) 証書において見られるように、Astruc が「無利息かつ好意をもって」(gratis et bona voluntate) 行動することを記しているが、同時に、“assegurare et fidejubere” という言葉が見られ、特に興味深い。

《Anno Domini millesimo tricentesimo vicesimo octavo, die (le jour et le mois ont été oubliés) duodecime indictionis, noverint universi et singuli presentes pariter et futuri quod cum nobilis vir dominus Johannes Atulphi de Massilia miles fecerit, constituerit et ordinaverit suum nuncium, negociatorem, gestorem, patronum et ductorem cujusdam galee sue vocate *Sante Aventure* ad dominandum patronandum regendum et gubernandum ac etiam ducendum dictam galeam videlicet Jacominum Marquesani de Tagia fratrem et ut conjunctam personam Guideti Marquesani civis et habitatoris Nicie sub tali pocto et conventionem quod dictus Jacominus noviter factus patronus dicte galee promisit et convenit dicto domino Johanni Atulphi militi dictam galeam habere tenere periculo suo etiam assure et fidejubere pro ea usque ad ducentos florenos auri fini de Florencia recti et justii ponderis silicet de Gibilinis Saone et aliarum partium riparie Janue et de pelatis Monachi ad voluntatem et requisitionem dicti domini Johannis Atulphi seu alterius legitime persone pro eodem de predicta securitate usque ad dictam quantitatem sibi dare ydoneam cautionem in ciuitate Tholoni uel in castro Arearum prout predicta omnia universa et singula latius constant quodam publico instrumento scripto manu Bartholomei de Salinis notarii publici de Massilia facto sub in nomine Domini Amen anno incarnationis ejusdem M<sup>o</sup> CCC<sup>o</sup> XXVII<sup>o</sup> indictione duodecima die duodecimo novembris hora tercię. Ecce nunc quod predicta galea appellata ut predicatur *Santa Aventura* aplica-

ta et existenti nunc in portu seu plagia maris castri Arearum, Astrugus de Narbona alias dictus de Sancto Yberio judeus habitator dicti castri Arearum, certificatus de predictis omnibus universis et singulis et in sua presentia lecto recitato et divulgato romana lingua toto tenore instrumenti predicti, *gratis et bona uoluntate motus non deceptus nec coactus neque in aliquo circumventus, prece et requisitione predicti Jacomini Marquesani presentis petentis et requirentis suo nomine proprio et nomine ac ut conjuncte persone predicti Guideti Marquesani fratris sui de solvendis restituendis et assignandis in castro Arearum predicto domino Johanni Atulpho militi seu alii legitime persone pro eo predictis ducentis florenis auri fini de Florentia de bono pondere pro ecemenda solutione satisfactione interesse precio et valore dicte galee cum sua sarcia corredo et apparatu, si hinc ad gestum sancti Johannis Baptiste primo venturum ipsam galeam capi alienari transferri et dissipari contingeret quod Deo avertat per Gibilinos Saone et aliarum partium riparie Janue seu per pelatos de Monaco, se obligavit et constituit fidejussorem principalem solutorem et debitorem penes Bertrandum Melli de Massilia presentem stipulantem et recipientem nomine procuratoris predicti domini Johannis Atulphi militis, de quo procuracione constat quodam publico instrumento scripto manu predicti Bartholomei de Salinis notarii publici facto sub in nomine Domini Amen anno incarnationis ejusdem M<sup>o</sup> C<sup>o</sup> C<sup>o</sup> XXV<sup>o</sup> III<sup>o</sup> indictione duodecima die duodecimo Novembris, hora Tercie, sub obligatione omnium bonorum predicti Astrugi judei presentium et futurorum refectionis et restitutionis dampnorum expensarum gravaminum interesse disturbiorum litis in lite et extra litem; renuntians dictus Astrugus judeus expresse, beneficio nove constitutionis de fidejussoribus quod dicit quod si principalis et fidejussor ambo videlicet sunt*

ydonei et solvendo debet primo conveniri principalis quam fidejussor, et exceptioni doli et conditioni sive causa in factumque actioni induciis viginti dierum et quatuor mensium et omni alii juri rationi deffentioni exceptioni et ex pacto expresso petitioni et oblationi libelli translatum hujus instrumenti non petendo et deinceps omni alii juri per quod contra predicta vel aliquis ex eis modo aliquo facere uel venire posset seu ea infringere et etiam in aliquo revocare.

De quibus omnibus universis et singulis supradictis, predictus Bertrandus Melli quo supra nomine petiit sibi fieri publicum instrumentum per me notarium subscriptum. Actum Areis in operatorio Hugonis Aygleveni in presentia et testimonio Raymundi Castelli notarii publici, Petri Grassi juvenis testium et mei Johannis Textoris notarii publici auctoritate regis Jerusalem et Sicilie constituti qui hanc cartam publicam scripsi et signo meo solito signavi.》

〔主キリスト降誕1328年第12回公会議召集の日に<sup>6</sup>、マルセイユの官吏である、高貴な人 Jean Atulphi は、実際にニース (Nice) の市民であり住人である Guidel Marquesani の兄弟であり、かつ事業の協力者である Tagia の Jacomin Marquesani を、自己所有の Sainte Aventure 号と呼ばれるガリー船を指揮し、守護し、管理し、支配し、かつ操船さえも行なわせるために、自己の代理人、同ガリー船の管理人、支配人、船長および指揮者としたことを、現在および将来にわたって了解した。新たに同ガリー船の船長に任命された上記 Jacomin は、上記の官吏 Jean Atulphi に対して、同ガリー船を自己の危険で占有し、適正な重量のフィレンツェの純金200フロリンの金額で同船を保険し、かつ補償することを約束した。この保険

6 原文には、「月」と「日」の記載が漏れている。

は、サヴォーナ (Savone) およびジェノヴァ海岸の他の場所のギベリーノ派の者たち (les Gibelins) およびモナコの“pelatis” がもたらす危険について付けられる。この保険は、上記の補償につき上記金額を限度として、Jean Atulphiまたは法律上彼に取って代る資格を有する他の者の意向および求めに応じて付けられる。Jacomínは、全体としてまたは個別になされたこれらの条項が、『主キリストの名において、アーメン』という祈りの下に、マルセイユの公証人 Barthélémy de Salins の手で書かれた公正証書をもって合意されたすべての範囲に充当すべきトゥーロン (Toulon) 市または Hyères 市の住人の有効な保証を、Jean Atulphi または法律上彼に取って代る資格を有する他の者に与える。

主キリスト降誕1328年第12回公会議招集の日である11月12日9時。

Sainte Aventure 号と呼ばれるガリー船は、現在係留されて、Hyères 市の港に在る。Hyères 市に住む、かつて Saint-Yves と呼ばれたナルボンヌの Astrug は、その面前でローマの言葉で読み上げられた本契約のすべての条項および上記証書のすべての内容について了解した上で、自分自身の名およびその兄弟であり現在事業の協力者である上記 Guidel Marquesani の名で現在要求し申請している Jacomin Marquesani の依頼を受け、かつその求めに応じて、全く騙されることも、強制されることも、箝絡されることもなく、自らの意向と意思に従って、契約に参加した。本契約の目的は、今から洗者聖ヨハネの祝日<sup>7</sup>までの間に、同ガリー船自体がサヴォーナおよびジェノヴァ海岸の他の場所のギベリーノ派の者たちによって、またはモナコの“pelatis”によって、捕獲され、拿捕され、奪われ、破壊されるに至った場合に (神がこの様なことを退け給うことを)、すべての艦装を伴った良好な状態の上記ガリー船の価格および価額に充当するための

---

7 6月24日。

支払または損害賠償金を入手する（獲得する）ために、Hyères 市において、官吏 Jean Atulphi 氏に対して、または彼によって法律上資格を与えられた他の者に対して、フィレンツェの純金で200フロリンを支払うことである。Astrug は、官吏である上記 Jean Atulphi の代理人として契約の履行を要求し、債務を受けるマルセイユの Bertrand Melli に対して、保証人、主たる支払人および債務者となるべき義務を負い、かつその者に任命された。この代理権は、『主キリストの名において、アーメン』という祈りの下になされた、公証人である上記 Barthélémy de Salins の自筆の公正証書に基づくものである。主キリストの1328年第12回公会議招集の日である11月12日9時、上記 Astrug のすべての担保の下に、Astrug は損害賠償金、費用、現在および将来の修繕費、訴訟上のまたは訴訟外の紛争問題の修復費用を引受ける。上記 Astrug は、主たる債務者および保証人が互いに、明らかに支払能力を有する場合には、保証人および……<sup>8</sup>よりも先に主たる債務者に（債務の弁済を）行なわせなければならないという保証人に関する新たな規定の恩恵を明示的に放棄する。

そして、上記取り決めの全体および各々から、上記の資格の下に行動する上記 Bertrand Melli は、下記の公証人である私に対して、彼のために公正証書を作成することを要求した。

公証人 Raymond Castel, 証人 Pierre Gras, およびエルサレムおよびシシリーの王の決定により公証人に任命された私 Jean Textor 自身の面前で、かつ宣誓を得て、Hyères 市の Hugon Ayglevin の執務室においてこれを作成した。私 Jean Textor がこれを書き、私の通常の自署を以って署名した。』

---

8 原文に含まれる曖昧な用語や形式の集まりから、Gallix の載せている仏語訳では、原文の *exceptioni* から *etiam in aliquo revocare* までの5行を省略している。これは恐らく、Gallix が Baratier et Reynaud. *op. cit.*, T. II, p. 885 の仏訳をそのまま転記したためであろう。——注3参照。

### 3. 1379年2月15日の仮装売買契約書

また更に一步進んで、売買の形式を取りながらも実質は保険であるという、いわゆる「仮装売買」(vente fictive)の保険に関する1379年2月15日の契約書<sup>9</sup>が、パリの国立図書館所蔵の当時の公証人の記録の中に見出される。

この1379年2月15日の契約書の原文を次に示そう。

《Anno quo supra die XV mensis februarii in vespers. Notum sit etc. quod syer (?) Fredericus Giraudi mercator de Albenguena pro ut asserit habeat penes se quingenta quincalia caseorum Sardinensium in presente civitate Massilia, pro quibus tractata fiunt baraca sive excambium inter eum et honestum virum Julianum de Casalibus mercatorem dicte civitatis pro sex peciis pannorum diversorum de Melinis et sex peciis pannorum diversorum colorum de Vernisio ac viginti peciis pannorum diversorum colorum Lingue Ocitane quas similiter idem Julianus habet in civitate presenti. Ecce quod nunc dicti Fredericus et Julianus volentes dictum excambium ducere ad effectum bona fide etc. per se et suos cambium baracam atque permutationem firmam et irrevocabilem inter eos fecere et concordiam inhibere per modum subscriptum pro precii infrascriptis ut quod dictus Fredericus dedit tradidit et concessit per se et suos virtute presenti excambii seu barace eidem Juliano dicta quingenta quincalia caseorum precio unius mille florenorum auri de camera. Quequedam quingenta quincalia caseorum ipse Julianus pro se et suos confessus fuit habuisse a dicto Frederico et integre recepisse. Et e converso dictus Julianus per se et suos dedit et concessit

9 Bibliothèque Nationale, Manuscript, N. Acq. Latines 1342-f° 26 v°~f°28

eidem Frederico presenti stipulanti et recipienti pro se et suos dictos pannos superius declaratos, ut dictas sex pecias pannorum de Melunis precio sexaginta florinorum auri de camera pro qualibet pecia. Item dicta sex pecias pannorum de Vernisio precio quadraginta florinorum auri de camera pro qualibet pecia. Item et dictas viginta pecias pannorum Lingue Ocitane precio viginti florenorum auri de camera pro singuli pecia, quoquodem precio ipsorum pannorum summam proficiunt mille florinorum auri de camera, quas pecias pannorum omnes et singulas dictus Fredericus per se et suos confessus fuit habuisse et integre recepisse a dicto Juliano peciis supradictis.

Renunciantes, etc. Promettentes, etc. (formules)

Actum Massiliae in butigia dicti Juliani sita in carraria speciarie.

Johannes de Cugis

Anthonius Barberii

Monetus Cauderie                      de Massilia

et Syffredus Odoli

Subscripsi ego Laurentius Aycardi notarius.

Eodem die... notum sit etc. quod honestus vir Julianus de Casalibus mercator de Massilia bona fide etc. per se et suos confessus fuit et publice recognovit dicto Frederico Guiraudi mercatori de Albenguena presenti stipulanti et recipienti pro se et suis ab ipso Frederico habuisse et veraciter ac integre accepisse mille et centum triginta filis caseorum Sardinensium assendentium summam seu valorem mille florinorum auri de camera causa assicuracionis facte per ipsum Julianum eidem Frederico de caseis supradictis.

Renuntiantes etc.

Quosquidem mille centum triginta quinque filis caseorum Sardinensium

promisit solvere et convenir dictus Julianus per se et suos eidem Frederico presenti stipulanti et receipienti mandare per mare apud Sahonam hinc ad festum Pascaram proximum futurum sumptibus propriis ipsius Frederici et ad fortunam dicti maris et periculum malorum ventium et resigum ipsius Juliani. Ipsosque caseos sumptibus periculo fortuna et resigno supradictis dare tradere et consignare et dari et tradi seu consignari facere eidem Frederico in dicto loco de Sahona vel alteri recipienti legitime pro eodem...》

すなわち、この契約書によれば、マルセイユの商人 Julien de Casaulx (Julianum de Casalibus) は、1,000フロリンでアルベンガ (Albenga) の Frédéric Giraudi<sup>10</sup>からサルディニア (Sardaigne) のチーズを受取ったことを言明し、このチーズを自らの危険と Frédéric の費用負担でパーク (Pâques) からサヴォーナまで運送することを約束している。そして、損害が発生した場合には、Julian は Frédéric に1,000フロリンを支払い、逆に損害がなければ、この契約をなかったものとするのである。つまり、Julien de Casaulx は、積荷であるチーズの買い取りを仮装し、航海中損害が発生すれば、売買契約に従って Frédéric Giraudi に1,000フロリンを支払い、積荷が無事到着すれば、売買契約そのものを無効とすることによって、保険と同じような危険負担をしたのである。

#### 4. 無利息消費貸借の様式

さらに、1379年の日付けをもった多数の無利息消費貸借 (mutuum gratis et amore) を仮装した保険契約書がマルセイユの県立古文書館に保存されている。

10 Baratier et Reynaud, *op cit*, p. 885, n. 2 は (Frédéric Imperiali) としている。

これは常に、またはほとんど常に、次に示すような定型化された様式をもって行われていた<sup>11</sup>。

《Stephanus... dominus et patronus... recognovit Petro... habuisse causa veri mutui gratie et amoris... florinos, implicatos et conversos per eum in armamento et necessariis usibus dicte galee, videlicet ad fortunam Dei, usus maris et aquarum dulcium, periculum ignis et malarum gentium, ac resignum ipsius Petri, et ad partem lucri vel perdimenti.》

ところで、木村博士は、マルセイユが仮装売買形式の保険をジェノヴァから知ったと判断しておられるが<sup>12</sup>、上記の仮装無利息消費貸借契約の形式が、Enrico Bensa の《Il contratto di assicurazione nel medio evo》(中世における保険契約)に掲げられている1340年のジェノヴァのものと似ているところから、マルセイユは、仮装売買形式の保険ばかりではなく、無利息消費貸借を仮装した保険契約についても、ジェノヴァから知ったと推論できようか。

## 5. ジェノヴァの影響

14世紀末から15世紀初頭にかけて、マルセイユは、緊張する国際関係の中にあって幾多の戦争の巻き添えを食い、特に、アンジユ公ルイ2世によるナポリ王国への派兵(王位継承戦争への参加)によって疲弊した。1407年には、護送船団が荒天によって破壊され、その多くの船舶を所有していたマルセイユ人が大損害を被るといふ事件が起きた。

このように、マルセイユの15世紀初頭は非常に不幸であったが、1423年のア

---

11 Sayous, *op. cit.*, pp. 43-44

12 木村栄一「フランスにおける海上保険および海上保険証券の生成」【大林良一博士退官記念保険学論集】p 44。

ラゴン人の襲撃はこの不幸に追い討ちをかけた。この襲撃を受けたマルセイユの貿易取引を支配していた商人たちが滅び、新たに同地に移住したラングドック人、カタローニア人およびとりわけジェノヴァ人やフィレンツェ人など多数の活発な外国人たちが、同地の商業に重要な地位を占めるに至った。

現存している非常にたくさんの公証人の古記録から、マルセイユの商人たちは、1425年以前には全くと言っていいほどに真正保険（保険料保険）契約を無視していたことが分かるが、この外国人、とりわけ当時すでに海上保険の制度が弘布していたイタリアのジェノヴァから移住した商人たちが、マルセイユにおける保険の生成に大きな足跡を残したと思われる。すなわち、マルセイユで現在知られる最古の真正海上保険契約は、1426年のもの（複数）であるが、その保険契約における保険者は Raphaël Castagne, Barthélemy de Marinis, Martin Domestègue, Raphaël Corezza といったジェノヴァの商人であったこと<sup>13</sup>、その後の初期のマルセイユの海上保険契約を見ても、独占的ではないにしても、Lombardino di Passano, Julien de Cazaux, Giovanni di Remezano, di Marinis 家, Corezza 家, Doria 家, Vento 家の Pierre や Adam, Nicolas Spinulla, Balthazar de Paul, Perucci, Caponi Ceratorii 等、ジェノヴァ人保険者が圧倒的に多いこと<sup>14</sup>、初期の保険契約がフィレンツェやピサ（Pise）において見られるようなイタリア語のものではなく、ジェノヴァで行われていたようなラテン語のものであること<sup>15</sup>、契約内容や約款が他の地のものと比べて極めて少ないこと<sup>16</sup>、さらには、マルセイユにおける海上保険契約書はジェノヴァにおけると同様に、公証人によって作成されていること<sup>17</sup>等から、マルセイユに

---

13 Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 886, n. 1.

14 Boiteux, *op. cit.*, p. 92.

15 Florence Elder de Roover, *Early examples of marine insurance* (the Journal of Economic History, Vol. V, No 2, 1945), 木村栄一・前掲論文 p. 46; 同・「ロイズ海上保険証券の系譜」【一橋大学研究年報・商学研究】第18号, pp. 133~134.

16 Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 885, n. 3.

17 de Roover, *op. cit.*, p. 187.

は、海上保険は15世紀の初頭にジェノヴァ人から伝えられたと推論できる<sup>18</sup>。

この近隣国ジェノヴァの影響は、バルセロナにおいてフィレンツェの影響が<sup>19</sup>強かったのと異なり、マルセイユにおいて、その後も長い間続いている。

## 6. 1427年2月17日の保険契約書

マルセイユの県立古文書館には、1427年2月17日の保険契約書が保存されている。以下に、その原文および拙訳を示そう。

《Anno incarnationis Domini millesimo CCCC XX sexto, die XVII mensis febroarii, hora circa vesperis — Notum sit etc... quod cum nuper honorabiles viri Raphael Castanee, Julianus de Remezano et Raphael Carreza januenses et Johannes Forbini, Gabriel Vassalhi et Raymundus Blancardi de civitate Massilie assecravissent presentem ciuitatem usque summam duorum milium florenorum de rege currentium ponendorum et convertendorum per dictam ciuitatem in preciiis bladorum recipiendorum et onerandorum in carcatoreis locorum de Foro Julio et de Grimal in certis barchiis mitendis per dictam ciuitatem ad carcatoreia predicta videlicet dictus Raphael Castanee pro quadringentis florenis et dictus Julianus de Remezano pro quadringentis florenis et dictus Raphael Carregua pro quadringentis fl. et dictus Johannes Forbini pro quadringentis fl. et dictus Gabriel Vassalhi pro ducentis florenis et dictus Raymundus Blancardi pro aliis ducentis florenis Cum pacto quod omnes assecuratores predicti non possent currere riscum in una dictarum barchiarum nisi solum et dumtaxat pro sexcentis

18 木村栄一・前掲書, pp. 162~163も, Ripert, G., *Droit Maritime*, 4th ed., III, Paris, p. 300 も, マルセイユにはジェノヴァから海上保険は伝えられたと考えておられるようである。

19 Boiteux, *op. cit.*, p. 92

florenis prout constare asseritur (in) nota quadam scripta per magistrum Raymundum Bidaudi notarium massilie publicum sub anno presenti et die in ea contento

cumque nunc de uoluntate partium navis Bertrandi Forbini debeat accedere sive navigare ad carcatoria supradicta de Foro Julio et de Grimaldo pro dictis bladis onerandis et portandis ad hanc ciuitatem ecce quod dominus Bartholomeus de Marinis januensis mercator interveniens ut asserit in hac causa vice et nomine prefati domini Raphaelis Castanee pro quo promisit de rato et dictus Julianus de Remezano nomine suo proprio et dictus Raphael Carrega etiam nomine suo proprio et dictus Johannes Forbini etiam nomine suo proprio et dictus Raymundus Blancardi nomine suo proprio omnes simul unanimiter et concorditer et quilibet pro rata promiserunt et conuenerunt ac pactum et conventionem fecerunt cum nobilibus uiris Johanne de Jerusalem et Petro Folcardi sindicis et sindicariis nominibus dicte ciuitatis Massilie presentibus, stipulantibus et recipientibus vice et nomine unitatis dicte ciuitatis et pro ea uidelicet currere resiguum sive riscum omnes domini assecuratores predicti de tota quantitate dictorum duorum milium florenorum quod esse debebat in dictis barchiis uidelicet in et super navi predicta

sub obligationibus iurium, renunciacionibus ac aliis clausulis et cauthelis in nota predicta expressatis ad quam dicte partes se refferunt. jurantes etc.

de quibus utraque pars etc.

Actum Massilia in aula domus dicte ciuitatis

Testes nobiles. Petrus Vinaudi [ou Vivaudi], Jacobus Gassini, Guillelmus de Favacio, Antonius de Cepeta de Massilia.》

〔主キリスト降誕1427年2月17日3時頃。最近、尊敬すべきジェノヴァ

人である Raphaël Castagne, Julien de Remezano および Raphaël Carreza, 並びにマルセイユの市民である Jean Forbini, Gabriel Vassalhi および Raymond Blancardi は、上記マルセイユ市の上記の倉庫に運送するために、堅牢な小船に積載されるはずであったフレジュス (Fréjus) およびグリモー (Grimaud)<sup>20</sup>の町の小麦の価格を; マルセイユ市が売却し、売り捌く国王の相場で、2,000フロリンの金額まで、マルセイユ市に対して保険を提供したことを了解していた。恐らく、上記 Raphaël Castagne は400フロリン、上記 Julien de Remezano は400フロリン、上記 Raphaël Carreza は400フロリン、上記 Jean Forbini は400フロリン、上記 Gabriel Vassalhi は200フロリン、そして上記 Raymond Blancardi は200フロリンについてであったが、上記すべての保険者は、上記小船1隻につき600フロリンを限度に危険を負担すべきことを条件としていた。この事実は、本年中のこの覚え書に記された日に、マルセイユの公証人 Raymond Bidaudi 氏によって書かれた覚え書において保証されていた。

ところが、当事者の意思により、Bertrand Forbini の船舶が、フレジュスおよびグリモーにおいてすべての小麦を積載し、マルセイユ市に運送するために、同地の倉庫に赴くことになったため、上記 Raphaël Castagne, Julien de Remezano および Raphaël Carreza の諸氏、並びに上記 Jean Forbini および Raymond Blancardi の諸氏の全員および各自が、上に定める担保について全員一致で合意して、各自が有効に約束したことを確認するために、ジェノヴァ人である Barhélemy de Marinis が介入し、上記諸氏

---

20 Gallix は、原文の Grimal という地名を、当時イタリア国境近くに在った港町の Grimaldi と解しているが (ibid., p. 71, n 33), この Grimal という町がマルセイユから小船で往復できる距離にあったこと、フレジュス (Fréjus) と並置されていること、また通常の文書では主たる地名が先に書かれるのが普通と思われること等から、これはグリモー (Grimaud) と考えるのが適当ではないか。

に代って、上記マルセイユ市の代表市民でありかつ上記マルセイユ市の代表市民の資格で行動し、上記市においておよび上記市全体の名においておよび上記市のために要求し、受け入れる貴族 Jean de Jerusalem Pierre Folcardi と、この契約をもって約束し、協定し、締結し、合意した。本契約の条件に従い、上記保険者諸氏は、数隻の小船に積載されるはずであったが、その後上記一隻の船舶で積送されることになった上記2,000フロリンの全金額の担保および危険を負担することを約束し、決定した。本契約は、上記両当事者が従い、……について合意した上記覚え書に記されている権利、権利放棄についての保証およびその他の条項の下に締結される。

証人、マルセイユの貴族 Pierre Vinaudi [または Vivaudi], Jacques Gassini, Guillaume de Favacio, Antoine de Cepeta。]

中世における公正証書は、その内容や記述の点で曖昧であったり、文法的におかしかったりするものが多い。本証書も同様に、意味不明の点もあるが、ただ内容はかなり明快である。すなわち、マルセイユ市は、フレジュス産およびグリモー産の小麦を数隻の小船で運送する決定をし、この運送について5人の保険者と保険契約を締結した。そこで、第1の公正証書が作成された。しかし、何らかの理由によって、この小船による運送は中止され、ただ一隻の大型船舶による運送に切り替えられたために、第2の公正証書が作成されたのである。これによって、最初の数隻の小船による運送の保険を引受けた5名の保険者は、その保険契約の内容を変更することなく、第2の方法、つまりただ1隻の大型船舶による運送についても、引受けることに合意したのである。ただ唯一の変更は、小船による運送の場合には、保険者の責任は一隻当たり600フロリンに制限されていたものが、大型船舶による運送については2,000フロリンとなった点だけである<sup>21</sup>。

この契約においても、Raphaël Castanee<sup>22</sup>, Julianus de Remezano<sup>23</sup>, Raphaël

Carreza<sup>24</sup>といったジェノヴァ出身の証人が登場している。

ところで、この保険契約書は、フランス海上保険史研究において非常に重要な意味を持つ。なぜならば、フランス海上保険史に関するフランスおよびわが国のこれまでの研究では、フランス人が保険者として登場してくるのは16世紀に近くなってからであると考えられていた<sup>25</sup>。ところが、原文にもはっきりと見られるとおり、このマルセイユで現在知られる最も初期の海上保険契約において、上記三人のジェノヴァ出身の商人と並んで、Jean Forbin<sup>26</sup>, Gabriel Vassalh, Raymond Blancard という名前のフランス人が保険者として登場しているからである。

ついでながら、上記三人のフランス人保険者の他にも、Jacques Forbin, Barthélemy Capelle, Jean de Montolieu, Jacques Adam, Manuel Gallerand, Bernard Coste 等、すべて大商人であるマルセイユ人保険者グループがかなり

21 この2,000フロリンは、1426年の保険契約における保険者の一人である Raphaël Castagne がマルセイユ市に前貸したものである。

この Raphaël Castagne (Catagne とも書かれる) は、マルセイユにおいて一旗揚げようとジェノヴァからやってきた人物であるが、マルセイユの市民権を得ようとはしなかった。彼は後に、海上商業における多数の争いを仲裁している。

22 Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 886, n. 1 は Raphaël Castanee と書いており、筆者の手にある写真でも、同じく Castanee と読み取れるが、本契約に対する係わりから判断して、Raphaël Castanee は Raphaël Castagne と同一人物であると考えて差し支えないであろう。

23 彼は、ジェノヴァからマルセイユに移住して帰化した Remesan 家の一員で、フランス名 Julien de Remesan と同一人であるとする。なぜならば、Julien de Remesan も、この1427年2月17日の小麦の購入に関与しているからである。——*Cf.* Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 713

24 原文では Carrega と読み取れるが、Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 191, n. 5 は Carreza と書いている。Gallix, *op. cit.*, pp. 70 et 71 も Carreza と書いているので、拙訳でも Carreza と表記した。また Bouteux, *op. cit.*, p. 92 には Raphaël Corezza という名前が見られるが、これも Raphaël Carreza と同一人であると考えて差し支えないと思う。

25 Masson, *op. cit.*, p. 211; 木村栄一・前掲書 p. 169; 同・前掲論文 p. 55。

26 Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 886, n. 1. なお、この Jean Forbin は、二番目の兄 Bertrand Forbin とともに、マルセイユ最大の名家 Forbin 家を築いた人物で、1425年、1431年および1443年の3回にわたって、マルセイユ総督を務めた。プロヴァンスとフランスの合併に貢献した Palamède 大公の叔父にあたる。なお、父親の Guillaume Forbin は Aix でなめし皮商を営んでいた商人である。

急速に形成され、また Marco di Marco, Ricci Altovis, Paul 家, del Bene 家, Perucci 家などフィレンツェからの移住商人も加わって、マルセイユの海上保険市場は、15世紀を通して長足の進歩を遂げた<sup>27</sup>。

## 7. 1427年11月26日の保険証券

1426年と1427年との二年間における海上保険契約に関する記録はかなりたくさん現存しているが<sup>28</sup>、その契約の形式および内容までもわれわれが知ることのできるものはそれほど多くはない。その少ない史料の中で最も古いものの一つは、やはりマルセイユの県立古文書館に保存されている1427年11月26日の保険証券である。木村栄一博士は、これをもって現在われわれが知っている最古のフランス海上保険証券であると述べておられるが<sup>29</sup>、これが誤りであることについてはすでに記した。しかし、これは当時の典型的な海上保険契約様式をわれわれに示してくれる貴重なものであるから<sup>30</sup>、以下にこの原文を紹介しよう<sup>31</sup>。

《Anno incarnationis Domini M<sup>o</sup>CCCC XXVII, die mercuri XXVI mensis novembris...notum sit etc...quod cum nobiles Jac. Guassini et Petrus de Scalis, consocii oneraverint in et super barchia Hugonis de Neapoli de Berra, 50 barrillas plenas piscibus dictis malstanz, 200 fl., pro portendo eas

27 Boiteux, *op. cit.*, p. 92

28、船積み中にパーク船が沈没したならば、実際に船積みされていた小麦の部分についてのみ担保するということを規定していた1426年10月14日の保険証券や、海上ばかりではなく、河川（ローヌ河）航行中の損害をも担保した1427年10月6日の保険証券など、多数存在する。——Cf. Boiteux, *op. cit.*, p. 93, et Baratter et Reynaud, *op. cit.*, p. 886, n. 2.

29 木村栄一・前掲書, p 162.

30 Baratter et Reynaud, *op. cit.*, p. 885, n 3

31 この保険証券については、木村栄一・前掲書 p 162でも解説しておられるので、邦訳についても、同書に拠らせていただいた。

de portu presenti ad civitatem Avennionis, ecce quod nunc honorabilis vir Raphael Gastanhie mercator, civis civitatis Massilie, pro se et suis, assecuravit 100 fl. in et super dictis 50 barrilis vehendis per mare cum dicta barchia... resiguo et fortuna ipsius assecuratorii videlicet ignis, maris, cursariorum, et malarum gentium, assecuramento et pro eodem habuit fl. 4 de rege, quod habuit numeratione continua... hoc de pacto quod casu quo sinistrum deveniat de mercantiis jamdictis, quod absit, eo casu juxta modum assecuramentorum dictos 100 fl. solvere teneat...》

「主キリスト降誕1427年11月26日水曜日において……次のことを表明する。貴族 Jacques Guassini および Pierre de Scalis は共同して、この港からアヴィニオン市に行くべく Hugo de Neapoli de Barre の船に積まれた200フロリンの価値を有する malstanh という魚の50樽に関し、マルセイユ市の市民、商人 Raphael Gastanhie に対し、彼および彼の親族のために、上記船で海上運送される50樽について、100フロリンを保険した。

……本保険の危険は、火災の、海の、および船員の非行の危険であり、これに対して現金で4フロリンを受取った……。上記商人について事故が発生したときは、行方不明の場合においても、保険の内容に従って上記100フロリンを支払うことを約束する。……」

本契約において注意を引く点は、マルセイユの貴族 Jacques Guassini および Pierre de Scalis は、ジェノヴァ人保険者の Raphael Gastanhie<sup>32</sup>に対して、200フロリンの貨物につき100フロリンの保険を付けたこと、保険料率は4%であったこと、担保危険は「火災の、海の、船員の非行の危険および行方不明」であったことである。しかし、本証券がイタリア語ではなくラテン語で書かれ

32 前記注22に述べたジェノヴァ人商人 Raphaël Castanee と同一人物であろう。

ていること、証券に記載されている条項が極めて少ないこと、および担保危険を定めた危険条項は簡単で総括文言がないこと等から、本保険証券はジェノヴァ証券、一層正確には14世紀末からトスカーナ証券の影響を受けていたジェノヴァ証券の流れを汲むものであることが分かる<sup>33</sup>。

## 8. 1438年3月29日の保険契約書および1438年12月18日の記録

これまでに述べてきた史料以外で、現在知られている1400年代のマルセイユの海上保険契約に関する記録は、Paul Masson が1921年にパリの学会で、また翌1922年にマルセイユの学会で発表した《L'Origine des Assurances Maritimes, spécialement en France et à Marseille》において公にしたものが二つある。その一つは、Sante-Marie号積みのワインの積荷に関する海上保険契約の存在を証明する1438年3月29日の契約書であり、他の一つは、Salvage Salvagii なるジェノヴァの貴族に対して、マルセイユからジェノヴァに運送される麦の積荷を付保する代理権を与えている1438年12月18日の記録である。

この二つの史料の内容については、すでに木村栄一博士が、前掲の『ロイズ保険証券生成史』(pp. 163～169)において、上記 Masson に拠って詳細に検討しておられるので、ここでは、木村博士の同書によって、この二つの史料を紹介するにとどめよう(同訳についても、同書に拠らせていただいた)<sup>34</sup>。

[1438年3月29日付けの契約書]

《*Relevatio indenpmitatis pro Jacobo Ventura* [29 mars 1438].—Anno incarnationis domini millesimo IIII° XXXVIII°, die XXIX mensis marcii, hora vesperorum. Notum sit cunctis presentibus et futuris, quod cum, his annis

33 木村栄一・前掲書, pp. 162-163。

34 ただし、最初の史料の日付けについて、木村博士は「1438年2月29日付け」としておられるが、これは「1438年3月29日付け」の誤りである。

non longe deffluxis, honorabilis vir Odo Rau mercator civitatis Januensis, more mercantili, sibi assecurari fecerit, nomine honorabilis viri Jaco Venturo mercatoris florentini habitatoris civitatis Avinionis, certam quantitatem vini onustam in quadam nave patronisata per Alvarum Ferandes de Lisbona regni Portugalli, sub nomine Sancte Marie appellata, quam vini quantitatem predictus Jaco Venturo asseruit fore suam, prout de hujusmodi assecuramento dicitur constare quodam publico documento manu cujusdam publici notarii civitatis predictae Janue confectae sub anno et die in eo contentis, cumque rey veritas sic se habeat quod ipsa quantitas vini sit nobilis et honorabilis (sic) virorum Marioto de Nerllis florentini et Bertrandi Furbini mercatorum civium civitatis Massilie et utriusque ipsorum pertineat et spectet pro certa summa, videlicet dicto Marioto pro summa tricentorum florenorum et jandicto Bertrando Furbini pro summa quingentorum florenorum, et per eos in dicta nave seu eorum precepto onusta fuerit, constante quadam nota, prout asseritur, sumpta per honorabilem et providum virum magistrum Raymundum Bidaudi, notarium dicte civitatis Massilie publicum, sub anno et die in ea contentis; denuo cum casu fortuito (sic) dicta navis onusta dicto vino et aliis diversis mercanciis, discessa a portu dicte Massilie civitatis faciendo recta via viagium suum versus partes Flandriorum, in portu de Seta per armatam et gentes regis de Portugalli (sic) capta extiterit, propter quo I dictus Jaco Venturo recuperare nititur assecuramentum predictum, creditque illud habere et recuperare dum tamen promissionem et obligationem faciat dicto Odo Rau in hunc qui sequitur modum: videlicet quod casu quo post dictum assecuramentum predictus Jaco Venturo aliquid in prejudicium dicti assecuramenti fecerit seu alias eidem derogaverit, teneatur tunc ad interesse, et si reperiat ipsum Jaco, post dticam cap-

tionem de dicta nave factam, aliquid de dicto vino recuperasse, tunc solvere et restituere teneatur in duplum dicto Odo Rau quantitatem per eundem Jaco habitam et recuperatam: et in hoc se submittat non velitque in illis iddem Jaco Venturo se obligare nisi prius sit cantus et securus a predictis mercatoribus Massilie quibus dictam summam (sic) pertinet et spectat: —ecce quod nunc predicti Mariot de Nerlis et Bertrandus Furbini, certificati ad plenum de omnibus superius enarratis, cupientes dictum Jaco Venturo reddere cautum pariter et securum, bona fide etc., per se et suos, quisque pro rata sua et prout ad unumquemque ipsorum tangit seu tangere poterit quomodolibet in futurum, promiserunt et soliditer convenerunt michi notario infrascripto tanquam publice et auctentice persone presenti stipulanti soliditer et recipienti vice, loco et nomine dicti Jaco Venturo absentis tanquam presentis et suorum, de eundem Jaco Venturo, licet absentem tanquam presentem, et bona sua et suorum presentia et futura servare et custodire indempnem et indempnia de predictis promissionibus, obligationibus expensis, dannis (sic), disturbiis et interesse per eum vel suos quoquomodo sustinendis exigendo et recuperando assecuramentum de dicto vino sibi factum prout supra declaratur.

In pace etc., sub esmenda etc., de quibus etc., obligatis etc., submittentes se realiter et personaliter etc., renunciantes etc., jurantes etc. De quibus etc. —Actum Masslie in quadam camera domus Johannis de Paulo sita supra Rippam. Testes, Johannes Tedaudi mercator florentinus, providi viri Petrus Blanqui, Pauletus Vassali mercatores, Et ego Palamides Vinaterius notarius etc.》

「キリスト降誕1438年3月29日夕刻。

現在および将来のすべての人に、次のことを表明する。数年前、ジェー

ノヴァの商人、尊敬すべき人物 Jacques Venture の名前で、ポルトガル王国のリスボンの Alvar Ferandès が船長である Ste-Marie と称する船に積込まれた、ある量のぶどう酒について、保険を与えた。ジューノヴァ市の一公証人によって、その裏面に記載されている年（月）日に作成された公文書が証明するように、Jacques Venture が付保したぶどう酒は、彼のものであった。しかし実際は、このぶどう酒は貴族で尊敬すべき人物のフィレンツェ人 Mariot de Nerles およびマルセーユ市の商人 Bertrand Forbin に属し、かつ、正確にいうと各人にそれぞれ一定量、すなわち、上記 Mariot に300フロリン、上記 Bertrand Forbin に500フロリン属し、それぞれ自己の計算で上記船舶に積込まれた。また、上記マルセーユ市の公証人、尊敬すべき、かつ、誠実な人物 Raymond Bidaud によって、その書面に記載された年（月）日に作成された文書が証明するように、上記ぶどう酒およびその他の各種貨物を積載した上記船舶が、上記マルセーユ市の港を発航し、フランドルに向け直航したが、偶然な事故により Seta 港でポルトガルの艦隊および人民により捕獲された。この理由に基づいて、上記 Jacques Venture は締結した保険で回復しようとするが、それには次のような約束により、上記 Odo Rau に義務を負わなければならない。すなわち、上記保険の後 Jacques Venture が上記保険によって損害に対して何らかの物を取得したときは利害関係人として責任を負い、上記船舶が上記の捕獲に遭遇した後、その Jacques が上記ぶどう酒の一部を回復したことが明らかになったときは、Odo Rau に対して、Jacques が受取り、回復した金額の2倍を支払い、返還しなければならない。このためにその Jacques Venture は、これについて約束はするが、その前に彼がまずマルセーユの上記商人達から上記の返還すべき金額について保障され、不安がないのであればならない。ここにおいて、上記 Mariot de Nerles と Bertrand Forbin は上記のことをすべて知った上で、Jacques Venture に対し、その善

意、……、彼および彼の家族、各人のために彼が受取ったもの、またはいかなる方法であれ、将来彼が受取ることのあるべきものについて、保障し、不安を取除く。彼らは、公証人として下に署名した私の前で連帯して約束し、ここにいない上記 Jacques Venture および彼の家族に代り、および彼の名前で、ここにはいないその Jacques Venture のために、連帯して約束し相互に承諾する。彼らの現在および将来の財産、並びに彼らの親族の現在および将来の財産は上記の約束の保証および担保並びに損害賠償に利用され、かつ保存され、彼が上記ぶどう酒の保険からいかなる方法で回収しようと、これらは彼および彼の親族のために提供される。上記の如く宣言する。

マルセーユの、岸辺にある、Jean de Paul の家の部屋で作成された。証人、フィレンツェの商人 Jean Tébaudi, 賢い人、商人の Pierre Blanqui および Paul Vassal, 並びに公証人の私 Palamède Vinatier など]

[1438年12月18日付けの記録]

《[18 décembre 1438]. —Eodem die, notum sit etc. quod nobilis vir Johannes Forbini habitator de Massilie (sic), ratificando et confirmando naulisationem et loquerium factos (sic) pro eo et suo nomine per nobilem virum dominum Salvagium Salvagii de Janua de quadam nave discreti viri Cosme Gaufridi de Nicia ad levandum MCCC viginti eminas bladorum dicti Johannis ad mensuram Janue, in portu Massilie portandorum ad Januam et omnia naulisamenta quarumcumque aliarum navium ad onerandum blada dicti Johannis in Massilia per dictum nobilem Salvagium pro dicto Johanne facta ex commissione et mandato factis propterea per dictum Johannem prefato domino Salvagio, et omnia gesta per dictum dominum Salvagium circa naulisamenta jandicta, et etiam ratificando et apporobando assecurationes

quascumque factas per dictum dominum Salvagium dictorum omnium bladorum onerandorum ipsius Johannis tam super dicta nave quam aliis quibuscumque navibus seu navigiis locantis (sic) seu naulisatis per eundem dominum Salvagium dicto nomine, bona fide etc., omni eo (sic) modo etc., fecit et constituit suum certum et indubitatum procuratorem, actorem et factorem specialem et generalem, videlicet dictum dominum Salvagium Salvagii, absentem tanquam presentem, specialiter et expresse ad locandum et naulisandum quascumque naves et navigia ad levandum et onerandum quantitates bladorum dicti Johannis Forbini in hac civitate Massilie, illaque portandum et exonerandum in dictam civitatem Janue atque tradendum et consignandum Bertrando Bellegoni factori dicti Johannis in civitate jandicta Janue commoranti, sub loquerio sive naulo et pactis quibus voluerit et melius poterit convenire, ipsaque naula solvere promitendum, et propterea bona dicti Johannis obligandum et ypothecandum: dictaque blada ipsius Johannis Forbini in solidum vel in parte assecurari petendum et faciendum per quascumque personas et sub assecuramento seu pretiis et pactis et modis quibus voluerit et sibi videbitur faciendum, ipsaque assecuramenta solvere promitendum sub bonorum obligatione, jurium renunciationibus et juramento et clausulis opportunis et consuetis in talibus in forma, protestandumque in judicio et extra ac in scriptis et sine, et pro premissis comparandum agendo et defendendo in omni et quocumque judicio ecclesiastico et seculari, ad omnes actus incunctenter usque finem.

Et demum generaliter etc.; dans etc., relevans etc., fidejubens, etc. promitens etc., obligans etc., renuncians etc., jurans etc.

Actum Massilie in curia regia. Testes Johannem Giraudi habitatorem et Hugo Peregrini laboratorem Massilie. Factum est instrumentum.》

「1438年12月18日。

本日次のことを確認する。マルセーユの住民、高貴な人 Jean Forbin は、ジェーノヴァの高貴な人 Salvage Salvagii が、上記 Jean の有するジェーノヴァ度量で1,320ミーナの麦を、マルセーユ港からジェーノヴァに運ぶために、ニースの Cosme Gaufridi の船を、Jean のために、かつ、Jean の名前でなす用船、上記 Jean によって上記 Salvagii に与えられた代理権に基づいて、上記 Salvagii が上記 Jean のために、Jean の麦をマルセーユから運ぶためになす、その他すべての船の用船、および上記 Salvagii により、上記用船に基づいてなされるすべての行為を承認する。また、上記 Jean の麦が、Jean の名前において善意で、上記の船または上記 Salvagii によって賃借もしくは用船されたその他すべての船で運送される前に、上記 Salvagii がなしたすべての保険を承認する。……特別に、または一般的に行動する一定の、かつ、不可抗力の代理権を与えた。すなわち、上記 Salvage Salvagii は、特別に、かつ明示的に、当マルセーユ市の上記 Jean Forbin の一定量の麦を積込み、これを上記ジェーノヴァ市に運び、荷卸し、上記ジェーノヴァ市に住む、Jean の代理人 Bertrand Bellegoni に引渡すために、彼の欲する運賃および契約内容で、すべての船およびすべての種類の船を賃借または用船しこの用船料を支払い、かつ、このために上記 Jean の財産を担保に提供する、代理権を有している。上記 Jean Forbin の麦を全部または一部付保することを欲し、かつ、保険、契約、またはその他彼が欲し、彼に適当と思われる形態で、すべての人によってこれをなすことができる。また、この保険を、その財産を拘束して、権利の放棄、宣誓または適当な通常の契約締結によって履行し、かつ、裁判上または裁判外において、書面を以てまたは書面なしに異議を申立てることができる。更に、躊躇することなく宗教上または世俗上の裁判所にあらゆる訴訟を提起することができる。……

マルセーユで、王室で作成された。商人、マルセーユの住人 Jean Giraud および職人 Hugo Périgrini。契約はなされた。」

これら二つの記録で注目すべき点は、すでに述べた1427年2月17日の保険契約において保険者としての役割を果たしていた Jean Forbin が、この1438年12月18日の記録においては被保険者として登場していること、また前者の1438年3月29日の記録においては、Jean の兄の Bertrand Forbin が登場していること、更に両方の記録において、保険契約はジェノヴァにおいて締結されていること、である。

なお、1438年3月29日の契約書に出てくる Sainte-Marie 号は、もともと Forbin 家の持ち船であったが、1435年8月に、あるジェノヴァ人に売却されたのである。

## 9. 1434年7月28日の保険契約に関する記録

さらにもう一つ、年時は少々遡るが、マルセイユからアルジェロ (Alghero) まで運送される60フロリンの価額の4梱包の珊瑚について、3フロリン3グロスの保険料をもって締結された1434年7月28日の保険契約に関する記録<sup>35</sup>があり、この契約においても Jean Forbin が登場しているが、彼が保険者として行動しているのか被保険者として行動しているのか明らかでない。

## 10. 1584年10月15日の St. Ilary 号積み貨物の保険証券

ルネッサンスの世紀、すなわち16世紀は、保険が今日見られるのとはほぼ同じような、はっきりとした概観を現わした世紀であり、小さな点を除いて保険が画一化の傾向を示し、粗筋において今日まで存続している諸規則を採用した世

---

35 Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 886, n. 2 (A. D. des Bouches-du-Rhône, Verdillon 97. f<sup>o</sup> 43)

紀である。またこの世紀は、保険が全ヨーロッパに、またアドリアーティコ海からエルベ河やテムズ河にまで及んだ時期でもある<sup>36</sup>。

マルセイユでは、16世紀の初頭に、1523年1月28日のフィレンツェ市条例に倣って、「保険証券を認め、保険料を決定し、保険証券を修正」し、さらに契約書に法律上の認証を与える義務と権限を有する保険委員 (députés ou depputtés) が、同市議会によって商人の中から<sup>37</sup>2名<sup>38</sup>選任された。

この制度が採用された日付けははっきりせず、また長続きもしなかった。すなわち、1614年以降は、保険仲立人自身が、この Depputtés の審査を受けずに契約を締結し、保険証券にサインをすることになったからである<sup>39</sup>。

とにかく、この Depputtés によって認証された現在知られる最初の契約書は、マルセイユの商工会議所 (Chambre de Commerce et d'Industrie de Marseille) に保存されているかの有名な1584年10月15日付けの聖イラリー号 (St. Ilary) 積み貨物の保険証券である。

この保険証券は、ロイズ保険証券の源流となった上記1523年1月28日のフィレンツェ市条例の付則に掲げられた保険証券様式 (およびその原型となった1397年7月10日のフィレンツェ証券) に倣ったものであるが<sup>40</sup>、後のマルセイユの海上保険証券にも大きな影響を与えているので、マルセイユ商工会議所の archiviste である Monsieur Courdurié のご好意によって入手できた同保険証券の活字文 (多くの誤字があるが、原文のまま) とその英訳<sup>41</sup>を掲げよう。

36 Boiteux, *op. cit.*, p. 109.

37 この députés (または depputtés) は、前年の商事裁判官がなることもあった。

38 フィレンツェにおいては、この保険委員 (spettabili officiali di sicurtà) は5名であった。なお、フィレンツェ市の保険委員については、木村栄一・前掲書 p 188 参照。

39 Boiteux, *op. cit.*, pp. 109-110.

40 木村栄一・前掲書 pp. 181-182; 同・「資料・1584年マルセイユ海上保険証券」【保険学雑誌】第422号、昭和38年、pp. 153-164。

41 英訳は、Gow, W., *Marine Insurance*, 5th ed., 1931, Appendix B, pp 338-340 に掲げられている Committee of Lloyd's の翻訳である。

## 《—JHESUS MARIA—》

Au nom de Dieu et de la Vierge Maryne que conduyze le tout a bon salvement—Se fait assurer Sr. Guillaume Puech, pour son compte propre, d'antrée, tant sulement d'ici de Marcelhe fins en Trippolly de Surye, sus le veseau nommé S<sup>t</sup> Ilary, patron Jehan Viguié, hou aultre que sera, prenent les soubssignés assureurs les risques, peryl de la présente surté, laquele comansera du jour et heure que les marchadises seront étés chargées sus dit veseau, jusques à tant que soit arryvé audit Trippolly, e la, toutes les marchandises deschargées en terre à bon salvement, alors s'entendra estre fyni les risques, peryl de la prezente surté.

Et, en cas de desgrace, que Dieu ne veulhie, ledit Puech ne sera tenu montrer aultres escriptures que les polyces de chargement, et ainssin sont d'acort pour pache exprès.

Et plus veult le dit Puech que tous seux de la présente seurté prendront et soustiendront et passeront tous les mesmes risques, peryl et fortune que s'est passé, tant divin que humain, d'amys que ennemys, cogitte, incogitte, tanssion de segnorye, tant ecleziastiques que tanporeles reprezalhies, marque contremarque, juste hou verement injuste, de bande, contrebande, de feu, de vent, jet de mer, naviguant à destre et senestre, durant ledit voiage, et de toutes aultres périls, risques et fortunes que le dit surnommé passer porroit finalement, se metant au propre lieu et place de celui, comme cy assuré ne feuce, e que ne puyce dire ny a trouver canilation aulcune, au contrayne.

Et plus veult le dit Puech que, en cas de sinistre ou perte, que Dieu ne veulhie, que le dit patron aie autoritté de rachepter, recovrer et despan dre et s'antremetre et acorden et faire aultant que a luy semblera pour le

recouvrement des marchandises de dittes, sans lisance des assureurs aulx quel en tel cas rendra bon compte de tout.

Et pleus veult le dit Puech que, en cas de sinistre ou perte, que Dieu ne veulhie, que les assureurs ayent à poyer pour chescum d'eulx les sommes aseurées tout ou partye trois mois après entendue la nouvelle assurée de la perte dudit veseau, que Dyeu ne veulhie, les assureurs seront teneux premièrement, de poyer et puy playder se bon leur semble, et, au dit cas, le dit sieur Guillaume Puech sera tenu de baiher une bone et sofizante caution, que promettra de rendre et restituer à chescum d'eux les sommes que pour heulx seront estés desbourcées, avecque le benefice de tant pour cent, come les juges des marchans en jugeront en cas que les heuce mal receu, dont pour ce fait les soussignés asereurs auront de terme dix vhyt moix à prover se que à heulx plera.

Et pour estre vray le conteneu de la présente surté, les soubzignés assureurs se hobligent leurs persones et biens meubles et inmeubles, présentz et advenyr, en toutes Cours exprécément, et nimèment en la Court de Messrs les Juges de marchans de Marcelhe.

Et pleus veult et declare le dit Sr. Puech, et ainsin sont d'acort avecque les soubzés assureurs, que la présente escripte de surté aye aultant de force et viguer come si feuce faite de notayre royal autantique; a la melheur forme et manyère que fayre hou dire ce puyce, avecques toutes les cauteles et clauzules que apartiennent aux surettés, à la charge toutes foix que eles seront autorisées, tacxcées et signées par Messrs les Depputtés. Et Dieu le face salve. Amen.

Nous, Augier Riquety et Doumergue André, depputtés sur la taxation des assurtés, avons taxé et modéré la présente surtté, suyvant la tenur de

la susditte escripte d'yey en Tripouly de Surye, à reison de cinq pour cent. Fait à Marselhe, ce XV<sup>e</sup> octobre 1584.

(*Signé*) A. RIQUETY, Depputté. DOUMERGUE André, député.

100. Je, Marc de Roddes, assuree, en la forme et manière contenue en la susdite seureté, pour cent escut sol, et ay heu per mon risc cinq escut par mains de Marquiot Gapallon. Ce XX<sup>e</sup> octobre 1584. Et Dieu la salve.

100. Je, Roubert Begue, assuree, à la forme et manière que dessus, pour la somme de cent escus sol, et pour mon risc ay receu par les mains de Melchior Gapailhon cinq escus de mesme vailleur. A Marselhe, le XX<sup>e</sup> octobre 1584. Dieu la salve.

50. Io, Pompeo Pescioni, assieuro, nel modo e forma in qual contenuto, per la somma di cinquanta scuti di sole, et per mio risico ho ricevuto, per man del detto Capaglione, due scuti et mezo simili. A Marsiglia, giorno di 20 Oct<sup>e</sup> 1584. E Dio la facei salva.》

(英 訳)

#### 《† JESUS MARIA

In the name of God and of the Virgin Mary—may they bring all to good safety—Sire Guillaume Puech doth cause himself to be assured for his own account in respect of the lading, so far only as from this port of Marseilles [lit. from here Marseilles] to Tripoli in Syria on board the vessel named “St. Ilary”, Master, Jehan Viguie, or whosoever shall be [Master]. The undersigned Assurers accept the risks and perils of the present security, which shall commence the day and hour that the goods are loaded aboard the said vessel [and continue] until she shall have arrived at the

said Tripoli and all the goods [are] there discharged on land in good safety, when the risks and perils of the present security shall be understood to be ended.

And in case of misfortune, which God forbid, the said Puech shall not be bound to produce any other documents than the bills of lading (polyces de chargement) and thus it is expressly agreed.

And the said Puech further stipulates that all those concerned in the present security will take and sustain and incur all the same risks, perils, and chances which may arise from the act of God or man (lit. as well human as divine), from friends or enemies, known or unknown, from restraints of authorities whether ecclesiastical or temporal, reprisals [letters of] marque and counter-marque, just or in point of fact unjust, from prohibitions of all sorts, from fire, from wind, jettison, navigation to the right and left during the said voyage, and from all other perils, risks and chances that the above named might ultimately incur, putting themselves in his very place and position as if he were unable to effect insurance, and shall not seek any pretext of cancellation.

And the said Puech further stipulates that in case of accident or loss, which God forbid, the said Master may have authority to buy back, recover, and spend, and intervene, and make agreement, and do whatever he shall deem fit for the recovery of the said goods, without license of the assurers, to whom in such case he shall render good account of all.

And the said Puech further stipulates that in case of accident or loss, which God forbid, the assurers shall have to pay, each one of them, the sums assured, in whole or in part, three months after hearing certain news of the loss of the said vessel, which God forbid. The assurers shall be

bound to pay in the first instance and afterwards they may institute proceedings if they think fit. And in such case the said Guillaume Puech shall be bound to furnish good and sufficient security promising to give up and refund to each of them the sums that have been disbursed on their behalf, with an addition of so much per cent as the Judges of the Merchants may decide, in the event of payment having been wrongfully received, for the proof of which the undersigned assurers shall be allowed a period of eighteen months.

And to make good the contents of the present security the undersigned assurers expressly pledge their persons and their estate, real and personal, present and to come, in all Courts, and particularly in the Court of Messieurs the Judges of the Merchants of Marseilles.

And the said Sire Puech further stipulates and declares, and is so agreed with the undersigned assurers, that this security shall have as much force and effect as if it were made by a King's notary himself, in the best form and manner that may be said or done, with all the stipulations and clauses that are proper to securities, provided always that they are authorized, taxed, and signed by Messieurs the Deputies. And may God make it safe. Amen.

We Augier Riquety and Doumergue André, Deputies for the taxation of assurances have taxed and regulated the present security according to the tenor of the above-named document of landing (*escrite d'antrée*) from here to Toripoli in Syria, at the rate of five per cent.

Done at Marseilles this 15<sup>th</sup> October 1584.

(Signed) A. RIQUETY, Deputé.

DOUMERGUE ANDRE, Deputé.

100 I Marc de Roddes assure in the form and manner contained in the above named security for one hundred écus sol, and have received for my risk five écus at the hands of Marquiot Gapallon. This 20<sup>th</sup> October 1584. And God save it.

100 I Robert Begue assure in the form and manner as above for the sum of one hundred écus sol and for my risk have received at the hands of Melchior Gapailhon five écus of like value. At Marseilles the 20<sup>th</sup> October 1584. God save it.

[original in italian.]》

50 I Pompeo Pescioni assure in the form and manner of this document for the sum of fifty écus sol and for my risk have received at the hands of the said Capaglione two and a half écus of like value. At Marseilles this 20<sup>th</sup> day of October 1584. And God make it safe.

Endorsed on wrapper.

Assurances by which any points in dispute are referred to Messieurs the Commercial Judges. For the Worshipful Masters and Deputies of Commerce of Marseilles.》

上記の原文および英訳から理解できるように、本契約では、マルセイユからシリアのトリポリまで St. Hary 号で運送される貨物（その詳細は判らない）について、Guillaume Puech が、Marc de Roddes および Roubert Begue という二人のフランス人保険者および Pompeo Pescioni という一人のイタリア人の保険者に計250エキュの保険を付けた。保険料率は5%であった。この保険証券は、後のロイズ保険証券と実によく似ているが、1523年のフィレンツェの保険証券とさらに一層類似しており、本保険証券がこのフィレンツェ証券と同一の系譜に属することが分かる<sup>42</sup>。1523年のフィレンツェ証券の原型は、14世紀末

の保険証券に見られるのであるから、一つの仮定として、マルセイユでは1523年以前から、その当時のフィレンツェ証券に倣ったフランス語証券を使用しており、St. Ilary 号積み貨物の保険証券は1523年のフィレンツェ証券を直接のパターンとしたものではないとも考えられるが、いずれにしても、同証券はフィレンツェの証券様式に拠っていることは事実である<sup>43</sup>。

## 11. 1400年代の船舶保険契約

1400年代の船舶保険契約に関する記録は非常に少なく、Baratier et Reynaud が公にしている1471年5月21日の記録<sup>44</sup>、Masson が発表した Sainte-Marie 号に係わる1496年の二つの記録<sup>45</sup>、および1497年4月27日付けの la Française 号の船体および運送賃に関する保険契約があるにすぎない。これは、例えば16世紀の Guidon de la mer においてさえも、船舶保険に割かれた部分が非常に少なかったことから判断して、船舶保険 (assurance sur corps—corpo—bush) の経済的重要性が当時はまだ限られたものであったことを示す証拠となろう。

## 12. 1471年5月21日の船舶保険契約に関する記録

1471年5月21日の記録は、フランスにおいて現在知られる最も古い船舶保険契約に関する記録であるが、これさえも、世界最古のジェノヴァの船舶保険契約、すなわちジェノヴァ～マヨルカ間の航海について、Georgius Lecavellum が Bartholome Bassus に保険を付した船舶 la Sta Clara 号に関する1347年10月23日の保険契約<sup>46</sup>から、すでに120年以上を経過している。

このフランス最古の船舶保険契約に関する1471年5月21日の記録は、アヴィ

42 木村栄一・前掲書, p. 175。

43 木村栄一・前掲書, pp. 181～182。

44 Baratier et Reynaud, *op. cit.*, p. 886, n. 4 (A. D. des Bouches-du-Rhône, Laget-Maria 446, f° 93 v°)。

45 Masson, *op. cit.*, pp. 211～212

46 Boiteux, *op. cit.*, pp. 148～149。

ニヨンの商人 Marabotin de Barthélemy の代理人である Honorat Forbin のために、Jean Huet が引受けた金銭消費貸借契約書の中に見出される<sup>47</sup>。

### 13. 1496年の Sainte-Marie 号保険契約

(1) Masson が公にした Sainte-Marie 号に係わる二つの記録のうちの一つ、すなわち1496年4月29日の日付けをもつ証書<sup>48</sup>は、保険証券に特定された事由が発生した場合に、貴族 Barthélemy Capelle に対して216フロリン、貴族 Adam Vento に対して100フロリン、貴族 Pierre Vento<sup>49</sup>に対して50フロリン、貴族 Charles Forbin<sup>50</sup>に対して200フロリン、の計566フロリンの保険金を請求するために、Jean Campel およびマルセイユ港に碇泊している船舶 Sainte-Marie 号の船長である Domingo (ou Dominique)<sup>51</sup> de Vacua が、マルセイユの商人 Adam Rondolive に与えた委任状である。

船舶 Sainte-Marie 号の保険証券および本保険契約を証する公証人の記録は、残念ながらない。船舶 Sainte-Marie 号自体は、地方の年代記作家 Valbelle によれば、商船ではなく、私掠船であったようである<sup>52</sup>。

(2) 1496年のもう一つの証書は、同年7月10日の日曜日に、Sainte-Marie 号がマルセイユ湾の Montredon 近くの Huveaune 海岸沖において、アラゴンの Ferdinand 王の船隊によって拿捕されたために、Adam Rondolive が7月17日に保険者に損害の発生を通知し、4人の保険者のうちの Pierre Vento と Char-

47 Archives départementales des Bouches-du-Rhône, Fonds Laget-Maria 446, f° 93 v°.

48 木村栄一・前掲論文「ロイズ海上保険証券の系譜」p. 55は1396年4月29日としておられるが、これは1496年4月29日のミス・プリントである。

49 Adam Vento と Pierre Vento は兄弟で、ジェノヴァ出身の貴族。兄の Adam は1489年に、弟の Pierre は1513年と1524年の二回にわたって、マルセイユ総督を務めた。

50 彼は既述の Jean Forbin の10人の子供の中の第7番目の子供で、1503年にマルセイユ総督を務めた。

51 1496年の二つの証書で名前が異なっている。

52 Masson, *op. cit.*, pp. 211-212.

les Forbin に債務の履行を要求している証書である<sup>53</sup>。

Masson は、上記 Sainte-Marie 号に関して、多数の敵船がプロヴァンスの海岸付近までも遊弋している状況の中で、マルセイユの貴族たちは特に危険の多い私掠船についてさえも戦争危険を引受けているのであるから<sup>54</sup>、彼らは、保険の引受けについて、すでにかなり長い間の実際の経験を積んでいたと考えることができると述べている<sup>55</sup>。

#### 14. 1497年4月27日の保険証券

マルセイユの県立古文書館 (Malauzat 153, f° 14) には、1497年4月27日の契約書が保存されており、それは以下のように定めていた。拙訳も併せて示そう。

《27 avril 1497.

Franciscus Perucci mercator florentinus, vellut patronus cuiusdam navis, vocate *la Francesa*, nunc in gargata presentis civitatis ramilie exeuntis assecuravit a personnis inferius particulariter descriptis summam scutorum auri de sole tricentumquingenta octo et unum tertium, in et super corpore dicte navis et nauliis eisdem in viaggio nuper (?) per eundem Perucci cum dicta nave fiendo a presenti civitate Massilie usque ad portum Ligorne et primo ab Alexandro Caponi scuta triginta tria cum uno tertio— Item a Ludovico Perucci scuta viginta tria cum uno tertio— Item a Johanne Belioti scuta viginta tria cum uno tertio— Item a Nicholao del Bene

53 Masson, *op. cit.*, p. 213.

54 Masson は、木村博士が述べておられるように (前掲書 p 169)、当時の国際事情の下で、私掠船をも付保する必要があったかどうかは明らかにしていない。

55 Masson, *op. cit.*, p. 212

scuta viginta tria cum uno tertio — Item a Bernardo Coste scuta 25 — Item a Antonio et Bartholomeo Carbinelli scuta triginta tria cum uno tertio; Item a Jacobo Ceristorii scuta 16 cum duobus tertiis. Item a Juliano et Donato Perucci scuta sexaginta sex cum duobus tertiis, Item a Claudio Philippi scuta quinquaginta; item a Ludovico Cazeti scuta triginta tria cum uno tertio Prefatus nobilis Franciscus Perucci patronus... declaravit casu quo aliquod sinistri esset de dicta sua navo eundo ad presenti civitate Massilliensi apud portum Ligorne, quod Deus me advertat, dictam securitatem esse et pertinere ad dictum Ludovicum de Santa Fide mercatorem habitantem Avinnionense.》

「現在、本市の“ramilie exeuntis”の“gargata”<sup>56</sup>に在る *la Française* という船舶のいわば船長である、フィレンツェの商人 François Perucci は、この Perucci が当マルセイユ市に在る同船をもって間もなくリボルノまで行なう航海における同船の船体および運送貨の両方について、以下に個別に述べる人たちに対して、すなわち、先ず Alexandre Caponi に対して33エキュ3分の1、同様に Louis Perucci に対して33エキュ3分の1、同様に Jean Belioti に対して23エキュ3分の1、同様に Nicolas del Bene に対して23エキュ3分の1、同様に Bernard Coste に対して25エキュ、同様に Antoine および Barthélémy Carbinelli に対して33エキュ3分の1、同様に Jacques Ceristori に対して16エキュ3分の2、同様に Julien および Donat Perucci に対して66エキュ3分の2、同様に Claude Philippi に対して50エキュ、同様に Louis Caseti に対して33エキュ3分の1の、358と3分の1エキュ・ドール・ソレイユの金額の保険を付けた。

56 “ramilie exeuntis” および “gargata” の意味は判然としない。——Gallix, *op. cit.*, p. 73. 後者は、一種の「倉庫」を意味するのではないかと、Gallix は述べている。

上記の、よく知られた船長である François Perucci は、……当マルセイユ市からリボルノの港への航行中に、上記船舶に何らかの不幸が生じた場合には——神がこのことから私を守り給わんことを——、上記保険はアヴィニヨンの住人で、商人である上記 Louis de Sainte Foy のものであり、彼に帰属するということを、宣言した。」

本保険契約の実際ははっきりしないが、上記の証書から判断すると、船舶 la Française 号の船長であるフィレンツェの商人 François Perucci は、マルセイユからイタリアのリボルノまで航海する同船の船体および運送賃について、12人の保険者に合計358エキュ3分の1<sup>57</sup>の保険を付けた。この船が航海中事故に遭遇したときには、保険金請求権は Louis de Sainte Foy に帰属するということを、François Perucci が宣言している証書である。これは、債権者の Louis de Sainte Foy が、債権保全のために、François Perucci に本保険を付けさせたか、またはすでに締結されていた本保険契約に基づく保険金請求権の譲渡を約束させたものであろう。

## 15. おわりに

Isidore Alauzet, André Belhomme, Alain Bessé 等のフランスの学者の「フランスに海上保険が誕生した時期は16世紀の末葉である」とする説が誤りであることを、筆者は既に公にした論文において指摘したところであり、また、「フランス人が保険者として登場してくるのは16世紀に近くなってからである」とするこれまでのわが国における説が誤りであることも、既に指摘した通りである。

---

57 原文では、合計保険金額は358エキュ3分の1となっているが、各保険者の付保金額を合計すると338エキュ3分の1となる。

本稿では、それを裏付ける形で、海上保険契約に非常に近い1328年11月12日の用船契約書から説き始め、次いでいわゆる「仮装売買」(vente fictive)の保険に関する1379年2月15日の契約書や1379年の無利息消費貸借(mutuum gratis et amore)を仮装した保険契約を経て、1426年の真正海上保険契約に至る過程を見た。これによって、海上保険は15世紀の初頭にジェノヴァ人によってマルセイユに伝えられたと思われること、および全く初期の時代から、Jean Forbin, Jacques Forbin, Gabriel Vassalh, Raymond Blancard, Barthélemy Capelle, Jean de Montolieu, Jacques Adam, Manuel Gallerand, Bernard Coste等のフランス人が保険者として登場していることを、われわれは知ったのである。

さらに、今日僅かに知られている1400年代の船舶保険契約に関する記録の中から、Baratier et Reynaud が公にしている1471年5月21日の記録、Masson が発表した Sainte-Marie 号に係わる1496年の二つの記録、および1497年4月27日付けの la Française 号の船体および運送賃に関する保険契約を紹介した。

これら主として1400年代の史料を通して、南仏マルセイユにおける海上保険契約の生成過程を概観できたと確信する。